

## 松永健哉著『民族の母』解説

まえだ  
前田 角藏

まず、作者松永健哉を紹介しておきたい。彼は、一九〇七（明治四〇）年八月一六日、長崎県野母崎に生まれた。長野師範、高知高校を経て、一九三〇（昭和五）年東京帝国大学教育学科に入学し、東大セツルメントに参加、また、管忠通らとともに「児童問題研究会」を結成した。この結成の背景にはファシズムに対して教育の領域においてどう対抗するかの問題意識があったようだ。昭和九年、東大を卒業し、都内の小学校教師となり、ますます児童教育に没頭していく。松永は在学中から創作を志してはいたが、卒業後は教育実践に没頭、特に教育紙芝居運動を起こして百種近い創作があるほどで、その熱情は、日本教育紙芝居連盟の結成から、さらにそれを発展させた一九三八（昭和一三）年七月の日本教育紙芝居協会の設立となつている。松永の教育紙芝居観には、娯楽性、大衆性中心の安直な街頭紙芝居への対抗意識なり、神聖なる国定（読本）への対抗としての（紙芝居）という意識などがあつた。しかし、この教育紙芝居運動も、しだいに時局への迎合性を示していった。どうしてそうなつていったのかは今後の研究課題として残されていると思うが、この間、『子供の自治生活』（記録文学）、『校外教育十講』を刊行している。

松永は、一九三八年の秋、南支軍報道班員として従軍、広東（広州）、汕頭、南寧らに転戦することになる。この間、国分一太郎を南支派遣軍報道部に口添えし、長編一つ（三部作）、短編八つを書いた。一九四〇（昭和一五）年一月、中国から帰還し、青年団本部に入る。戦後は、長欠児童生徒援護会常務理事などに関わりつつ、一九六五（昭和四〇）年四月、藤田保健衛生大学（前身は名古屋保健衛生大学）に採用、教育学、道徳学などを担当、教育活動

にも従事した。なお、次のような作品がある。『海の曙』（一九四二、第一出版社）、『二重湖』（一九六五・一〇、真髓社）、『かげろう』（一九六六・二、真髓社）、『少女スナマ』（一九七一、黄十字社）などである。

さて、作者松永は、本書『民族の母』（一九四一・二、四季書房）自序の中で本書のモチーフを次のように語っている。松永が子供相手の教育紙芝居運動に没頭して生きてきたことはすでに触れたが、広東攻略を一つの任務とする南支派遣軍報道班員として中国大陸に降り立ったとき、かれはその「近代戦の壮観」に全身を奪われ、ただひたすら「巨大な歴史の転回、聖戦の現実の姿」、その具体例としての「破竹の進撃と輝かしい広東入城に幻惑され」ていたという。報道班員の仕事とは「民衆宣伝」であるが、かれは「街頭宣伝に集る支那民衆」の「数」、<sup>レ</sup>「救済に用ゐる米や菓子、散布のビラ」の「数」、あるいは市内に戻ってくる「帰還民や開店」の「数」にのみ心を奪われ、昔ならいたく心痛めたであろう、例えば、「難民の母子」の「心情」に想像力を働かせることもなかったと述べている。ところが、その松永は、「二つ家に住み、日本軍の復興工作に協力してゐた」「八人の若い支那のインテリ婦人を識つた」ことで、安直なこれまでの仕事ぶりを反省することになり、それがまた、忘れていた「創作意欲を燃え上らせ」ることになったといふのである。松永は、日本軍に協力して復興事業にかかわる広東婦女会の八人の女性たちの中にそれぞれ固有の「血の滲む人間性を見た」のであり、その血の滲むへ人間性」を本書に書き込もうとしたのであった。

小説は、五章から成り立っている。小説内時間は、一九三八（昭和二三）年一〇月末から、翌年の六月四日、広東婦女会日本訪問使節一行が広東を出港する門出の日までの約七ヶ月ほどである。周知の如く、日本は優越した武力によって武漢および広州を占領したが、広い農村地帯は国民党あるいは共産党政権の支配下にあった。そこで、日本は「国民政府和ヲ対手トセズ」という強行路線を一部修正して「東亜新秩序」形成といった二種の懐柔策を中

国に提唱した。小説内時間は、この時期に当たっている。物語は、日本軍の広東攻略、入城、占領の一週間後の一〇月末、子供二人を連れた中国人の母親が、広東市街の東部から中心地にくたくたになりながら登ってくるころからはじまる。女の名は汪逸清で、後に広東婦女会で重要な働きをする女性である。汪はもともと「上流生活者の住宅街」に住み、よき家庭の（母）として生きることを生き甲斐にしていた。しかし、日本軍の侵攻で八年の楽しい結婚生活を失い、夫も行方不明となり、不安から阿片を吸うようになっていた。汪には、七つと五つの男の子供がいるが、英国を敵とし「反感」を抱き、結果として「日本婦人の奴隷根性」を身につけた女として疎んじられてきたところもあり、彼女の夫の従妹にあたる李福堅から広東の復興活動に参加するよう要請された時、救いを求めるように広東婦女会にかけ参じてきたのであり、夫の死を確認してからはますます会の仕事に没頭していくことになる。ところで、会のリーダーである李もまた、婚約者がいたが、漢奸の容疑で虐殺された経歴がある。李にとって日本軍は仇討ちをしてくれる味方ということになり、それが日本軍に協力している大きな理由ともなっていた。彼女もまた阿片の常習者であった。物語は、広東婦女会の準備会から始まり、さまざまな紆余曲折を経ながらついにその七ヶ月後、広東婦女会が日本を訪問するところまでが語られるが、その過程で、不正を行い墮落していく女、思想的苦悩に直面することで発狂する女、会の活動から離反し、獄に生きる女などが一方で語られる。しかし、語り手が中心的に語るのは、会の中心である李のますます自己を強固に練り上げ、最終的には阿片中毒にもうち勝ち、いわば中国民族の母を代表するような人間へと更正していく成長物語であり、もう一つは、「貴族的」でさえあった生活と感情を克服して李の後継者として成長していく汪の物語である。

広東放送局のアナウンサーとなった汪は、前線にでる危険性もなくなり、夢に描いていた家を持った。また、戦争によって生き別れた不幸な母子を救済し、「民族の更正の生きた象徴」として一緒に住まうこともできるように

なり、汪は会の活動に没頭し、広東婦女会の日本訪問の日も放送局から会の前途を高らかにアピールした。李を見送った汪は李から渡されたノートを開けてみた。そこには、阿片と戦った二七日間の壮烈な李の「死の記録」の全文が最後に載せられていた。もちろん、李は、阿片にうち勝ち、「勝利の遺書」と傍らには記されていた。李には二三歳の時、恋人余研因ができた。しかし、かれは捕らえられ殺された。李が、阿片を吸い出したのはその時からである。阿片に助けられることで生き延び、そして「復讐を誓った」のである。李は「党軍と旧政府の完全な崩壊に協力しよう」と思う。「復讐を実現してくれる人間が有難かつた」。李はこういう私憤からの広東婦女会結成の不純さを反省するが、しかし、「私のこの怨恨、この悲しみは実は我が民族共通の感情であり、私の敵は、少数の傀儡を除いた民族共通の敵であることを自覚するようになった」。だとすれば、その敵がもたらした阿片に頼っている生き方そのものが問われることになり、そこで李は死を賭して阿片をやめようと決意したのであった。そうして二七日目、李は「遂に悪魔との闘ひに克つた」のであった。李は、「白禍とその傀儡共の手で毒された」「肉体と精神」の汚れを断ち、健康な「肉体と精神」を持つ「民族の母」にふさわしい人間への「更正」を果たしたのであった。

作者松永健哉は、日本軍に協力する女達の行動とその内面の動機を日本人に分かるように語りきかせた。彼女達にとつてなぜ日本軍が敵ではなく、味方であるのかというその謎を解き明かしている。しかし、それが、東亜新秩序の論理であったこともまた事実だったのである。一緒に日本軍と協力して、憎き西欧と傀儡を追放し、理想の東亜の新秩序をつくりましようというのが日本の論理だったからである。

かつて、火野葦平は、『麦と兵隊』において、兵隊を讃え、一体化することで、自己のヒューマニズムの混乱から脱出しようとし、そしてさらに、この戦争によって「惨苦」を強いられる中国民衆に対しては、「麦」＝悠久な

る自然に生きる民族とか懐の深さ論を展開することで、中国民衆への自己のヒューマニズムの混乱から救われようとした。しかし、それは、火野のヒューマニズムの混乱からの解決であるにしても、日本の軍隊が現にへいま・ここんで行っている侵略性を忘却させてしまうだけでなく、結果として日本の軍隊を美化し、日本の戦争行為を正当化することであった。火野葦平は、かなりリベラルで良心的な作家であったが、そのリベラルさ、あるいは良心性ゆえに二様の観念的解決のその先にさらにもう一つの観念的解決を求め、それが「大東亜共栄圏」思想へとつながっていくことになった。本書での作者松永健哉もまた、悪質な作家であったわけではない。彼は日本軍に協力する不可解な女性たちに接すれば接するほど、〈歴史の悲劇〉に引き裂かれて生きざるを得ない中国女性の不幸、悲しさを読みとり、その結果、なんとか〈救い〉を出そうとした。しかし、それが、皮肉にも、日本軍と協力して、憎き西欧と傀儡を追放し、理想の東亜の新秩序をつくりましょうということになってしまった。もちろん、そうは言っても、本書には、戦争の矛盾、民族の矛盾にさらされることで、行方不明になったり、獄にとらわれたり、逃亡、あるいは発狂する中国女性も一方では記録されていて、それが薄っぺらな戦争小説から免れており、それが本書の一つの救いともなっている。

(宮崎大学教育文化学部教授)